

「三言」の編纂方法について

河井陽子

はじめに

明末の文人馮夢龍が編纂した「三言」は、『古今小説』（『喻世明言』）、『警世通言』、『醒世恒言』三書から成り、各書四十篇ずつ、計百二十篇の短篇白話小説を収めている。その編纂はどのように行われたのだろうか。「三言」所収の各作品の分析によって、因果応報・勸善懲惡を強調し、登場人物の真情に基づく行動を賛美する^①という方向で、作品の取捨選択が行なわれたり、改作・潤色等の手が加えられたりしていることが明らかにされている。これらは一編一篇について見たものだが、更に、四十篇（あるいは百二十篇）の作品がどのように配列されているかという問題がある。作品を個別に刊行するとは異なり、編纂作業を経て選集として刊行するからには、読者が最初から順々に読んでいくことを想定して、その配列にも何らかの工夫が為されていると思われる。四十篇をただ無造作にまとめるのではなく、ある意識に基づいて一編一篇を意図的に並べたとは考えられないだろうか。この、どのように配列しているかという問題は、「三言」の編纂過程を振り返る研究において、どのような作品にどのように手を加えているかという研究に比べるとまだ十分に考察されていないように思われる。本論文では、その配列の仕方を「三言」各書における四十篇の「構成」と呼び、馮夢龍の編纂作業を構成の面から探ってみた。

「三言」の構成については、これまでに対偶性ということが指摘されている。各篇には七字、或いは八字から成る題目が付いているが、この題目は、編纂の際に本来付いていた題名を改めたり新しく作ったりして、意識的に二篇一対にしたものであるとされている。³⁾ 加えて、題目のみならずその内容にも対偶性が見られるという論考もある。内田道夫氏は、「古今小説（あるいは「三言」）に見られる題目と排列はほぼ対偶によって形成され」、「そして内容も往往にして対偶的である場合がある」と述べ、古七「羊角哀」（『古今小説』第七卷「羊角哀捨命全文」をこのように略す。以下同様に略す。）と古八「吳保安」、古三一「闇陰司」と古三二「遊酆都」の例を挙げて、各二篇の内容の対偶性をストーリー展開が平行的である点に求めている。⁴⁾ また福満正博氏は、平行的なストーリー展開に基づく対偶性を指摘し、先行する『情史類略』所収作品との比較を通してそれに馮夢龍の編纂意図がどのように関わっているかを考察し、次のように結論を述べている。

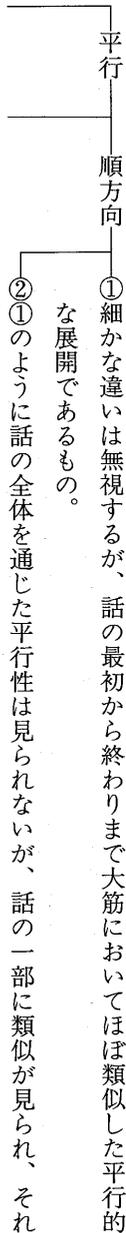
馮夢龍は、『古今小説』のすべての短篇が対偶構成となるように編纂していること、そしてその際、彼の編纂意図に沿って対偶を構成するように、各篇に編纂の手を加えた可能性が大きいということである。具体的には、伝本の選択や、内容の改作等が考えられる。⁵⁾

氏の考察は、『古今小説』の全篇が性質の違いはあれ対偶構成を成していること、また、それが編纂の過程で明確化されたものであることを明らかにした点が注目される。構成に関する先行研究を見てきたが、内容にまで踏み込んで対偶性を指摘した前述の二氏はいずれも『古今小説』のみを扱っているので、「古今小説（あるいは「三言」）」というように、『古今小説』に見られる対偶構成が「三言」全体でも見られることを括弧内で示唆してはいるものの、果たして同様な対偶構成が、残る『警世通言』『醒世恒言』各四十篇を通じても見られるものかは明らかにされていない。⁶⁾ 本論文では、この点を「三言」全体について、以下の手順で検討することにした。⁷⁾ 一、先ず「三言」所収作品を最初から二篇ずつ組にして計六十組の「対」を作る（なお論文中で「対」と言う場合には二篇を一組にした状

態を指すことにして、その二篇が対偶構成である場合の「対偶」と區別する。二篇を比較して、その対偶構成の度合いにより幾つかのパターンに対を分類し、「三言」全体がどのようなパターンの対から成るかを調べる。一、「三言」各書において、各パターンがどの位の割合を占めているのかを見ることにより、各書の特徴を探る。三、更に、対内部の二篇の配列順序、及び隣り合う対と対との関係を調べる。

一

初めに、各対内部の二篇がどのような構成になっているかを分析する方法について述べておくことにする。ここで、分析の重要な鍵となる対偶性を判断する指標として、二篇の「展開」と「主張」とに着目したい。「展開」とは、前述の二氏同様ストーリーの「流れ」を指すものである。話本は、基本的に題目、篇首、入話、頭回、正話、篇尾という六つの部分から成るが、このうち正話以後を対象にし、各対の二篇を比較して、展開に平行性、類似が見られるか否かにより大きく二つに分類する。平行である場合には、二篇がどのような結末を迎えるかによって二つに分ける。例えば二篇がいずれも団円で終わるというように、同じ場合を「順方向」、例えば一方が団円し一方が悲劇に終わるというように、異なる場合を「逆方向」とする。この各々において、平行性が話の枠組み全体を通じて見られるのか、あるいは一部に見られるものなのかという程度の差により二段階に分ける。ここまでは整理すれば、展開は次のように計五つ（大きく分類すれば二つ）に分類できる。



が同じ方向に発展、終結するもの。

逆方向
③話の最初から終わりまでを通じ大筋で平行的な展開であるが、例えば一方は団円、一方は悲劇に終わるといように、逆方向に発展して結末を迎えるもの。

④③のように話の全体を通じた平行性は見られないが、話の一部に類似が見られ、それが逆の方向に発展、終結するもの。

非平行
⑤展開に平行性、類似が見られないもの。

「主張」とは、馮夢龍が選択する時におそらく価値を見出だし、ここをこそ読者に伝えようとしたのではないかというストーリーの中心点である。「三言」の序文には、小説が人々を教化する有効な手段であると述べられており、各作品には読み手への何らかの主張が少なからず込められていると思われることから、構成を探る際には各作品の主張もまた考慮する必要がある。話本には、語り手（書き手）が話に一区切りを付けて要点をまとめたり、登場人物に批判や称賛を与えたり、聞き手（読み手）に忠告をしたりする箇所（韻文で端的に表現されていることが多い）が時折見られる。各篇の主張は、話中のこのような箇所から判断する。一篇の中で複数の主張が見られる場合は、より中心に伝えようとしているものを取り上げ（必ずしも一つとは限らない）、他は対と対との関係を見る際の参考にとどめる。二篇の主張を付き合わせて、それらが同じであるか、異なるかにより二つに分類する。以上展開と主張各二点からの分類を総合し、Ⅰ～Ⅳまでの計十パターンに各対を分類する。（パターンの表記法は表2参照。なお、展開が逆方向に平行であるものはローマ数字にダッシュを付し、平行性が話の一部にのみ見られるものは小文字のローマ数字を用いてこれを表した。）十パターンを大きくまとめれば、各対を「Ⅰ」～「Ⅳ」の計四パターンに分類することもできる。この四パターンの内、「Ⅰ」にあたる対は完全な対偶を成し、「Ⅱ」「Ⅲ」にあたる対は各々何らかの点で広義に対偶を

成していると判断する。残る「Ⅳ」は対偶を成さないものである。右のようにして調査した結果をまとめたものが表1である。(末尾に示す。)

二

表1に示す主なパターンから例を挙げて、対の二篇がどのようになっていくかを具体的に見てみよう。

「Ⅰ」(展開が平行で主張が同じもの)

醒七「錢秀才」

蘇州府呉江県の顔俊は、富商人高贊の娘、秋芳に縁談を申し込んだが、醜男で才に欠けているため破談にされるのを恐れ、いとこの錢青を替え玉に仕立てた。錢青が身代わりになったままうまい具合に話が進み、婚礼の式も挙げたが、錢青は花嫁に手を触れることさえしなかった。顔俊はこのことを信じず殴りかかり、両家の乱闘になった。県知事は子細を知って、錢青と秋芳の結婚を許す判決を下した。

醒八「喬太守」

宋の景祐年間、杭州の医師劉秉義には、孫寡婦の娘の珠姨と婚約している息子の劉璞と、裴九老の子と婚約している娘の慧娘がいた。婚礼も間近のある時、劉璞が突然の病で命も危ないことを知った孫寡婦は、娘の一生をあやまることを恐れて、息子の玉郎を女装させ身代りに嫁がせた。玉郎が慧娘と通じたことが露見すると、その事を耳にした裴九老は訴訟を起こした。喬太守は似合いの男女を見て、玉郎と慧娘、劉璞と珠姨、裴九老の子と玉郎の婚約者をそれぞれ夫婦にする判決を下した。

「錢秀才」の方は男が男の身代りになり、「喬太守」の方は男が女の身代りになって婚礼の場をしのぐが、後にそ

の計略が発覚して両家の争いになる。しかし裁きによって、替え玉になった者は本当に結婚することが許され、団円する。」という大筋において平行的展開であることがわかる。一方主張は何かと言えば、「錢秀才」に「古より姻縁皆分定まる 紅絲豈これ心の牽く有らんや」とあり、また「喬太守」の冒頭にも

古より姻縁天より定まる、人力謀り求めるに蹶らず、縁有らば千里もまた相投じ、面を対するも縁無くんば偶はず(略)

この西江月の詞は、だいたい人の婚姻とはすなわち前世の定めであつて、人の力で強いことができるものではないという意味です。今日お聞かせしますのは、思いもよらぬ姻縁話で、「喬太守亂點鴛鴦譜」と申します。⁽¹²⁾

とあるように、姻縁が天の定めによって決まっていることである。「錢秀才」の顔俊や、「喬太守」の李番頭が計略を用いて破談を試み、己の利を図ろうとも、結局姻縁を変えることはできなかつた。展開、主張の二点から判断して、この二篇はIパターンに分類でき、完全な対偶を成していると言える。

〔Ⅱ〕(展開が平行で主張が異なるもの)

醒二五「獨孤生」

唐の貞元年間、洛陽の進士獨孤遐叔は、知人を訪ねる旅の帰途龍華寺に泊した。一方夫の帰りを待ちきれず後を追った妻娟娟は、巫山の神女廟で遐叔が既に帰途についたとのお告げを聞いて家に引き返す途中、龍華寺で少年達の酒の相手を強いられた。それを見ていた遐叔が怒って煉瓦を投げ付けると、何もかも消えてしまった。遐叔が家に帰りこの事を娟娟に話すと、それは娟娟が昨晚夢見た内容と同じであつた。後に遐叔が出世して、二人は龍華寺を修復し、神女廟にお礼参りをした。

醒二六「薛録事」

唐の乾元年間、青城県の主簿薛偉がある日重い病にかかつて死んだ。人々は、再生するとう李八百の意見に従つて棺に納めずにおき、青城山の老君廟で祈禱をした。そのころ薛偉は江に入り一匹の鯉に身を変えていた。釣り上げられて塩漬けにされそうになった瞬間、薛偉は意識を取り戻し病は癒えていた。実は薛偉は、鯉に騎り昇天した神仙琴高で、夫人は仙女田四妃であったのが、俗念を起こしたためにこの世界に謫せられていたのだった。老君廟に参詣し、李八百に導かれ、後に二人は仙籍に戻つた。

二篇の展開は、「獨孤生」では娟娟が夢で龍華寺を訪れ、「薛録事」では薛偉が夢で鯉になつたというように、登場人物が夢を見るといふ点が共通しており、「その夢は危機一髪のところだ覚める。再会した夫婦は、無事であつたことを感謝して、靈験のあつた廟に参詣する。」というように大筋において等しい。では二篇の主張はどうであらうか。「獨孤生」で娟娟は、巫山の神女から遐叔の無事を聞く。これは、遐叔が巫山を通る時に自分の無事を伝えてくれるよう祈つたためであることが後に明かされる。夫婦の互いを想う深い情愛が、神女の心を動かし、また、

みなさんご存じありませんが、そもそも夢とは想いであり、因であります。何か原因があればすなわち想い、想えばすなわち夢を見るのであります。白氏は何をするにつけても一心に夫のことを心配しておりました。それ故夢の中を魂が飛び越え、実像となつたのです。遐叔とはいえば、これもまた妻を想い、その想いが極まつたために、目覚めているとはいへ心は妻の夢の中に入り込みました。これすなわち二人の心が相貫き、魂が相通じた結果であつて、よくあることでございます。どうしてうそなど申しませう。¹³

とあるように、夢で二人を引き合わせました。夫婦の深い情愛を称えている。一方「薛録事」における薛偉の夢は、太上老君が薛偉夫婦の俗念を取り除き再び仙籍に返すために見せたものであつた。二人が昇天して篇尾の詩に言う。

茫茫たる宇宙事端新たなり 人既に魚に為りて魚人に復る
幻形を識破して性を礙げず 形を休め性を修むれば即ち仙真なり¹⁴

神仙の流論を描き、魚が本物か人が本物かという姿の違いに惑わされて本性を損なうことが無いように、心を修めることを主張している。この二篇はⅡパターンの構成、即ち主張は異なるが、展開が大筋において平行であるという点で対偶構成を成している。

〔Ⅲ〕（展開が平行でなく主張が同じもの）

警九「李謫仙」

唐の李白は、渤海国の国書を解説するために召された際、以前楊国忠と高力士に不当に扱われた恨みを晴らして返書を書き上げた。官職を授かることを拒み、高力士の讒言により楊貴妃に疎まれると、李白は暇を乞い、故郷に帰って山水に遊ぶ旅に出た。永王璘の謀叛の際に叛徒として捕らえられたが、以前命を救った郭子儀に助けられた。後に采石江で鯨の背に乗り昇天した。

警一〇「錢舍人」

唐の憲宗の時、礼部尚書の張建封が燕子楼を建て寵愛した関盼盼は、張の死後も楼に留まり十余年間貞節を通していた。ある日白居易は、関盼盼が張建封に随って死ななかつたことを諫める詩を詠んだ。関盼盼は張建封の冥福を祈る毎日を通し、楼の近くに葬られた。宋の時、中書舎人の錢希白が楼を訪れ、関盼盼の貞節を憐み詩を詠んで弔ったところ、夢に関盼盼が現れ謝した。錢希白は「蝶恋花」の詞を作つてこのことを記した。

この二篇は、展開は全く異なるが、いずれも、詩文を愛する風雅な才子・才女のことを中心に描いている点が共通しており、この点で対偶を成している。「錢舍人」の篇尾には

一首の新詞麗客を弔ひ 貞魂笑を含みて夢に相逢ふ

翰苑名賢の事なりと雖も 編じて稗官小史のうちに入る

〔16〕

という詩が置かれている。後半二句に詠むことは、「李謫仙」にも充分当てはまることである。おそらく二篇を共に意識して詠んだのではないだろうか。この種の話をも「三言」に収めることの説明と受け取ることができる。

〔Ⅳ〕（展開に平行性も類似も見られず主張が異なるもの）

警五「呂大郎」

江南の無錫に呂玉、呂宝、呂珍という三人の兄弟がいた。ある日呂玉は、拾った金二百両を落し主に返したところ、行方不明になっていた息子の喜兒と偶然再会した。二人が帰宅する途中、呂玉は一艘の船が転覆しているのを見て、二十両を報酬に溺れている人々を救出させた。その中に呂玉を探しに來ていた呂珍がいた。そのころ呂宝は、呂玉が死んだと偽って嫂を再嫁させ結納金をせしめようと謀ったが、誤って自分の妻を売り払ってしまった。ちようどその時呂玉父子と呂珍が帰宅して、呂宝は逃げ去った。

警六「兪仲舉」

南宋の時、成都の秀才兪仲舉は科挙に落第し、鬱々と酒を飲む毎日を過していた。ある日西湖畔の豊樂楼で無銭飲食をし、壁に詞「鵲橋仙」を書き付けて身の不遇を嘆いた。太上皇がたまたまこの詞を見て、兪仲舉の才能を認め、成都の太守に任じ銀千両を与えた。兪仲舉は故郷に錦を飾った。

この二篇の展開には、平行性、類似が見られない。主張もまた異なっている。「呂大郎」では、一家が団円したのは呂玉が金に欲を出さなかったためであり、一方呂宝が自分の妻を売ってしまったのは自業自得であると述べて、是非善悪の報いが明らかであること、因果応報を主張している。一方、「兪仲舉」は一篇の詞が出世の道を開いた話で、篇首に「日月盈虧、星辰度を失ふ、人となり豈興衰なからんや」とあり、続けて長く不遇であったが最後には高位に上った古人の例を挙げ「時の來たるや、皆將相となる、まさに表すこれ男兒なり」と述べている。また篇尾に

昔年司馬は楊意に逢ひ

今日兪良は上皇に際う

もし文章をして皆主に遇はしめば 功名の遅早また何の妨げかあらん⁽¹⁶⁾

とあるように、人の出世は天の定めるものであって遅いも早いも人の力ではどうにもならないことを主張している。この二篇は展開も主張も異なり、対偶を成さない。

三

表1を基にして対六十組のパターン分類状況を示したものが表2である。

表2 対の分類状況 単位Ⅱ組 (計六十組)

2 A 十パターン分類の場合

異	同	主張		展開	
		全体	一部	順方向	非平行
Ⅱ	Ⅰ	全体	一部	平	行
6	29	ii	i		
0	3	Ⅱ	Ⅰ	逆方向	行
1	14	ii	i		
1	1	Ⅳ	Ⅲ	非平行	
4	1				

2 B 四パターン分類の場合

異	同	
Ⅱ	Ⅰ	平行
8	47	平行
Ⅳ	Ⅲ	非平行
4	1	非平行

[IV]	[III]	[II]		[I]		パターン 書名
		(II' ii)	(II ii)	(I' i)	(I i)	
0	0	0		20 (8)	12 (12)	古今小説
2	1	1 (1)	0 (0)	16 (6)	10 (10)	警世通言
2	0	7 (1)	6 (6)	11 (1)	10 (10)	醒世恒言
4	1	8 (2)	6 (6)	47 (15)	32 (32)	計

表3 「三言」各書における対の分類状況

単位Ⅱ組 (計六十組)

「I」が最も多くて全体の約八割を占め、展開、主張いずれかの点で対偶を成す「II」「III」を合わせると全体の九割に及ぶ。このことから、「三言」の構成は全体を通じ対偶性を原則にしていることが確認できる。展開の平行性を見る際に、全体を通じてか、或いは一部かにより二段階に分けたが、両者を比較してみると全体を通じたものの方が圧倒的に多い。展開の平行性は話の全体を通じて考慮されたものであることがわかる。また、その結末は順方向、すなわち二篇がほぼ類似した結末になる傾向が強い。

「三言」各書において対がどのようにパターン分類されたかを示したものが表3である。

これにより各書の特徴を見てみよう。各書とも展開が平行で主張が同じ対（「I」）の割合が最も高い。特に『古今小説』は二十組一貫してこのパターンである。『警世通言』ではこのパターンが約八割に減り、僅かずつではあるが全てのパターンが唯一揃っている。『醒世恒言』になると「I」のパターンは約五割を占めるのみとなるが、代わりに展開が平行で主張が異なる対（「II」）の割合が約三割と、「三言」中最も高くなっている。

合計すると各書とも二十組中約九割を占める「I」「II」に着目して、『古今小説』から『醒世恒言』へと編纂された順に見てみると、「I」が減少するにつれ「II」は増加するという傾向が見られる。これには二つの理由が考えられる。一つは、『古今小説』のように全て「I」に統一するのを理想とし極力試みはするが、後になるほど手持ちの作品が少なくなるためにそれが難しくなり、主張が異なっても展開が平行であればよしとする意識に改めた。あるいは、展開が平行である点で二篇を対偶にしておいて、むしろ積極的に多様な主張をしようとする意識に変わった、ということである。いずれにしても、『古今小説』編纂時には展開が平行で主張が同じである対偶構成を念頭に置いていたのが、『警世通言』『醒世恒言』になるにつれその編纂方針が柔軟化している。しかし一貫して、何らかの点で対偶構成の原則は守ろうと努め、展開が平行であることに留意したことは明らかである。

四

再び表1に戻り、今度は対内部に目を移して内部の二篇に決まった順序があるのかを探り、また、隣り合う対と対がどのような関係になっているのかも探ることにする。先ず二篇の配列順序を見てみよう。順序に何らかの傾向性があるならば分かりやすいのだが、実際は各対多様で法則化が難しい。しかし、話の中にその証明となりうる一節があつて、明らかに順序を意識して配列したと思われる対がある。古七「羊角哀」・八「吳保安」、警三「王安石」・四「拗相公」の二組である。ここではそのうち前者を見てみることにする。この二篇はIパターンの対で、いずれも

「ある男が、以前に受けた恩に命をかけて報いる。後にその義氣が称えられて祠に祭られる。」という平行的な展開である。「羊角哀」では、入話に春秋時代の管仲と鮑叔の交わりを挙げてから、正話の羊角哀と左伯桃の交わりへと話が進む。続く「吳保安」では、羊左のような交友（原文で「死友」という）を見るのが難しい時世であることを先ず述べ、それから正話に入る。その内容は、唐の玄宗の治世、保安が郭仲翔から受けた恩に報い、更に保安の死後今度は仲翔がその息子天祐に恩返しをするというものである。羊角哀が左伯桃の恩に報いて話が終わる「羊角哀」と比べると、報恩がもう一段階付け加わっている。仲翔の恩返しは話の中で次のように称えられている。

保安が先に恩を施したとは言え、郭仲翔の義氣もまたためつたにないもので、真に死友と言うに愧じないものであります。

当時、これは珍しい出来事としてあちらこちらに伝えられ、吳郭の友情は、古の管鮑、羊左と雖も及びはしないと言われました。¹⁷

吳郭の交友は羊左の交友と同様、「死友」と称するに値するものであること、「吳保安」は古人の交友譚である管鮑、羊左の交友に優るとも劣らない交友譚であること、が記されている。この二篇を「羊角哀」「吳保安」という順序で意識的に配列することで、読み手は古今の三つの交友譚を年代順に読み進めることが可能となる。歴史上有名な古人の交友譚を踏まえた上で吳郭の交友を示し、前二者に勝る評価を与えるという話の流れは、吳郭の交友の珍しさ、素晴らしさをより際立たせる効果を生んでいると言えるだろう。¹⁸

次に隣り合う対同士の関係を見てみよう。ある対を基準にして左右両隣の対と比較し、何らかの類似が見られるものを挙げていく。隣り合う二組の対において、連続した二篇ではなく一篇置きに、または二篇間を置いて類似が見られる場合があるが、その四篇中に見られるものであればこれを有効にする。しかし、ある二篇が類似していても、

同種の類似が見られない一組以上の対を隔てている場合は対象にしない。因果応報を説く篇はかなりの数にのぼるので、若干制限を付け、前因が同じであるものを有効にする。このように調査した結果を表1最下欄に示した。これによれば、約半数の対に主題と展開いずれかの点で隣り合う対と関連が見られる。類似は、隣り合う二組の対の中の二篇から四篇にわたって見られるのが大多数で、同種の類似が三、四組の対にまで及ぶことはほとんどない。ここではその中から、以下の二つの関係について主な例を挙げ述べようと思う。

(1) 四篇に関連が見られるもの

醒三七「杜子春」・三八「李道人」・三九「汪大尹」・四〇「馬當神」

前二篇はIパターンの対で、「男が善行を積み神仙に出会うが、あるタブーを犯したために再び世俗へ戻される。後に善行を積んで仙人になる。」という展開である。杜子春は仙人になる時、俗人が財物を惜しんで大道に気付かないことを嘆いている。「李道人」でも同様に、「神仙も是れ凡人の做るただ凡人の肯て修めざるが爲なり」とあるように、俗人が神仙になるためには欲を捨てて身を修めるべきことを主張している。後二篇はIVパターンの対であるが、「馬當神」の方は「詩人が詩才を買われ、風に乗って滕王閣へ飛び詩を詠む。後に天の定めに従い仙人になる。」という話である。天の定めによって、これもまた神仙になることを描いている。間に挟まれる「汪大尹」は、「子宝に恵まれるとのうわさが高い寺があったが、参詣した婦人が後に子を宿すのは、実は寺を挙げて姦淫を働いていたためであったことが汪大尹によって暴かれる。全僧侶がその場で斬刑に処せられ、寺は焼き払われる。」という話である。因果応報を説き姦淫を戒めており、一見すると残る三篇と関わりが無いようだが、この話をこの位置に置くことは場違いなことではない。それは篇首から窺うことができる。

髪を削ぎ緇を披て道を修め、香を焼き佛を禮して心虔なり、宜しく地に潜みて去りて胡纏し、清名をして玷有らしむるを致すべからず、佛を念じ齋を持して素を把らんとし、経を看坐を打ちて禪に参せんとす、逍遙として誕

を散らせば神仙に勝る、萬貫腰纏を羨まず⁽²⁰⁾

僧のあるべき姿を示し、身を修めれば神仙にも勝ることができると述べている。ここから推測するに、この話は身を修めず悪事を働いた僧の顛末を描いて、神仙になりたいと思っている人へ戒めを与える役割を果たしているようである。前二篇に続いて全く対照的なこの話を読むとその戒めは一層明確になる。欲を捨て身を修めて神仙になるか、或いは天の定めに従い神仙になるか。この四篇は「神仙になる方法」を提示しているところに共通点が見出させる。

(2)二組の対にまたがる二篇に関連が見られるもの

警五「呂大郎」・六「兪仲舉」・七「陳可常」・八「崔待詔」

前二篇はIVパターンの対で既に述べた通りである。後二篇はiパターンの対で、話の最後に、「登場人物の一人が実はこの世の者ではなく、前世に残した宿債を返すために現世に出現した者であることが明かされる」点が類似しており、応報を主張している。この四篇を通じた類似点は無いが、中二篇の「兪仲舉」と「陳可常」において見ることができる。「兪仲舉」は、一人の落第した秀才が酒家の壁に題した詞によって出世する話であった。一方「陳可常」は、三度科挙に落第して出家を決めた秀才陳可常が、身の不遇を嘆く詩を寺の壁に書き付けたところ、呉七郡王の目に留まり、郡王の引き立てで僧になるところから話が始まる。いずれも壁題の詩詞が出世のきっかけになっているのである。この類似部分が一話に占める程度を見てみると、「兪仲舉」から「崔待詔」までのつながりを捉えることができる。即ち、「兪仲舉」は出世する過程そのものが一話を構成しているが、「陳可常」では出世の過程は最初に簡単に触れるのみで、話の主はむしろ出世後に起きる出来事の方であり、続く「崔待詔」に類似した結末を迎える。「兪仲舉」と「崔待詔」の両方の要素を合わせ持つ「陳可常」が、両者の中継ぎの役割を果たしているかのようである。⁽²¹⁾

対と対は互いに全く何の関連も無く配列されているのではない。緩やかにではあるが対同士を結び付けている要素は、同種のもの三、四組の対にまで及ぶことはめったに無い。しかし表1から窺えるように、複数の要素が少しずつ

つ関わるることによって、最高で五組の対を結び付けることがある。「三言」所収の一篇一篇は、独立した小説でありながら何らかの点で隣り合う小説と対偶を成し、対と対とがさらに何らかの要素によって結び付いてつながりを生み、それが積み重なることによって四十篇、更には百二十篇のまとまりを作っていると考えられる。

おわりに

以上の考察から次のように結論できる。馮夢龍は、「三言」各対の二篇が原則として対偶を成すように四十篇を配列、構成した。その対偶構成は展開が話の全体を通じて平行で（順方向の結末であることが多い）、かつ二篇が同じ主張であることを重要視している。但し刊行年が後になる書ほどこのパターンは減少し、展開が平行であるという点で対偶を成す対が増加する。また各対は孤立したものではなく、隣り合う対と対は何らかの関連性によってゆるやかに結び付いていることが多い。

「三言」の編纂に関し、どのような作品を選択しているか、どのように改作や潤色等の手を加えているかという面は従来の研究で考察されてきたが、更に馮夢龍が「三言」全体を通じて作品の構成も考慮、工夫していたことが明らかになった。構成の工夫は、読者が読みやすいようにとの配慮から生まれるものであるが、なぜ対偶構成を選んだのだろうか。福満正博氏は、『古今小説』が対偶構成である理由を次のように述べている。

単独の短篇ではわかりにくい主題が、対偶として並べることによって、より明確に成ること、別の言い方をすれば、中国の伝統的な思考方法であり、表現の技法である対偶を、短篇の配置に応用したのではないかということである。²²

氏の考察は、そのまま「三言」全体にも当てはまると思われる。

「三言」全体を対象にしてその構成を考えれば、次に各書内の対の配列がどうなっているかという疑問が沸くが、

対の配列順序は明確にすることができず、隣り合う対で見られる類似を指摘するにとどまった。『古今小説』の天許齋による封面識語に、「本齋古今名人演義一百二十種を購い得、先ず三之一を以て初刻と爲すと云ふ」²³とあることから、当初から百二十篇を三書に分けて刊行する構想があつたこと、また『醒世恒言』の序文に「明はそれを取りて以て愚を導くべきなり、通はそれを取りて以て俗に適すべきなり、恒は則ちこれを習ひて厭はず、これを傳へて久しかるべし」²⁴とあることから、或いは各書はそれぞれの書名を反映するような作品を集めていることが推測できる。百二十篇をどのように三書に配分したのか、所収作品の内容（主張）から見た各書の特徴は何か、疑問が残る。今後の課題にしたい。

注

- (1) 内田道夫「古今小説の性格——歴史と小説——」（『文化』一七ノ六 一九五三、『中国小説研究』評論社 一九七七にも収める）、山口建治「三言」所収短編白話小説の成立要素——因縁譚の付加について——」（『集刊東洋学』三十三号 一九七五）、荒木猛「短編白話小説の展開——「三言」に見られる人生観を中心として——」（『集刊東洋学』三十七号 一九七七）、大木康「馮夢龍「三言」の編纂意図について——特に勸善懲惡の意義をめぐって——」（『東方学』六十九号 一九八五）等参照。
- (2) 大木康「馮夢龍「三言」の編纂意図について（続）——「真情」より見た一側面——」（『伊藤漱平教授退官記念中国学論集』汲古書院 一九八六）参照。
- (3) 嚴敦易「古今小説」四十篇的撰述時代」（『古今小説』文学古籍出版社 一九五五）、胡士瑩「話本小説概論」中華書局 一九八〇 四一七ページ、稲田尹「宋元話本類型考（三）——（一）制作時期の推定について・下の上——」（『鹿児島大学文科報告』第九号 一九六〇）にも若干言及されている。等参照。
- (4) 注（一）内田道夫前掲論文参照。
- (5) 福満正博「古今小説」の編纂方法——その対偶構成について——」（『中国文学論集』第十号 一九八一 九州大学中

国文学会参照。

- (6) 『警世通言』『醒世恒言』所収作品のうち、内容の対偶性が指摘されているのはごく数例である。内田道夫前掲論文では警一七「鈍秀才」・一八「老門生」が、中里見敬「△三言」における悲劇的作品の考察（『集刊東洋学』六十二号一九八九）では警二一「趙太祖」・二二「宋小官」が、各々指摘されている。涂秀虹「從「三言」看馮夢龍的貢獻」（『明清小說研究』一九九七第一期 江蘇省社會科學院文學研究所 明清小說研究中心）では、警一七「鈍秀才」・一八「老門生」、警二九「宿香亭」・三〇「金明池」、警三一「趙春兒」・三二「杜十娘」、醒三「賣油郎」・四「灌園叟」、醒三三「十五貫」・三四「一文錢」が挙げられている。氏は更に、『古今小説』における馮夢龍の編纂態度が、対偶構成の面から見て三集中最も「嚴謹」あることも示唆している。
- (7) テキストに使用したのは台湾世界書局印行、李田意蒐集編校の『古今小説』（一九九一、三月再版）『警世通言』（一九九一、三月再版）『醒世恒言』（一九八三、一月三版）である。また、人民文學出版社の排印本、『喻世明言』（許政揚校注 一九五八初版）『警世通言』（嚴敦易校注 一九五六初版）『醒世恒言』（顧学頤校注 一九五六初版）を参考にした。
- (8) 注(3)胡士瑩前掲書 一三四ページ参照。
- (9) 注(1)大木康前掲論文参照。
- (10) 挿入されている韻文の機能について考察したものに以下のものがある。荒木猛「短編白話小説における韻文の機能とその展開」（『信大史学』第四号 一九七九）、同「話本小説中の「常套句」について」（『論究』第十六輯 函館大学 一九八三）、勝山稔「中国短編小説の挿入句について——詩・詞・齊言句の挿入傾向と挿入意図の変化を中心として——」（『中央大学大学院論究』第二十七号 一九九五）。これらによれば、韻文にはその場の状況描写、登場人物の心理描写、補足説明、暗示、教訓や人生観を示す、間を取る等の機能がある。このうち主張を判断する際に参考にしたのは主に教訓や人生観を示していると思われる韻文である。
- (11) 「自古姻縁皆分定 紅絲豈是有心牽」
- (12) 「自古姻縁天定、不繇人力謀求、有縁千里也相投、對面而無縁不偶（略）這首西江月詞、大抵說人的婚姻、乃前生注定、非人力可以勉強、今日聽在下說一樁意外姻縁的故事、喚做喬太守亂點鴛鴦譜」

- (13) 「看官有所不知、大凡夢者想也、因也、有因便有想、有想便有夢、那白氏行思坐想、一心記掛着丈夫、所以夢中真靈飛越有形有像、俱爲實境、那遐叔亦因想念渾家、幽思已極、故此雖在醒時、這點神魂便入了渾家夢中、此乃兩下精神相貫魂魄感通淺而易見之事、怎說在下掉謊」
- (14) 「茫茫宇宙事端新人既爲魚魚復人 識破幻形不礙性 休形修性即仙眞」
- (15) 「一首新詞弔麗客 貞魂含笑夢相逢 雖爲翰苑名賢事 編入稗官史中」
- (16) 「日月盈虧、星辰失度、爲人豈無興衰(略)時來也、皆爲將相、方表是男兒」「昔年司馬逢楊意 今日俞良際上皇 若使文章皆遇主 功名遲早又何妨」
- (17) 「雖然保安施恩在前、也難得郭仲翔義氣、眞不愧死友者矣」「那時做一件奇事、遠近傳說都道吳郭交情、雖古之管鮑羊左、不能及也」
- (18) 「今古奇觀」は「吳保安」、「羊角哀」という順序で収録している。「三言」所収の対二篇を『今古奇觀』に収録する際、順序を逆にしてるのがこの他に数組ある。稲田氏が注(3)前掲論文の中に示す表によれば、「三言」所収の作品を対のまま収めている十組のうち四組(巻一・二〥醒二・一、巻三・四〥古一〇・九、巻一・一二〥古八・七、巻二・二二〥警一八・一七)に順序の逆転が見られる。
- (19) 「神仙本是凡人做 只爲凡人不肯修」
- (20) 「削髮披緇修道、燒香禮佛心虔、不宜潛地去胡纏、致使清名有玷、念佛持齋把素、看經打坐參禪、逍遙散誕勝神仙、萬貫腰纏不羨」
- (21) 残る「呂大郎」には隣り合う対との類似点が無い。同書内には二五「桂員外」・二六「唐解元」というIVパターンの対がもう一組あり、「桂員外」には同じく隣り合う対との類似点が無い。ここでこの二篇に注目し比較してみると、「桂員外」は、昔金を恵まれて命を救われた男が、恩を仇で返したために妻子が死ぬ報いを受ける話であり、金を施したために一家団円した「呂大郎」とは逆方向の結末を迎える平行的展開であることに気付く。同様に「俞仲舉」と「唐解元」は、才子がその詩詞の才で自分の望みをかなえる過程を描く話である。位置が離れてはいるが、同じIVパターンの対の中でこのような平行性が見られるのは興味深い。しかしその理由は分からない。ちなみに、「醒世恒言」内のIVパターンの対は二組あるが、同様のことが言える。二二「張淑兒」と三九「汪大尹」は、僧が寺を挙げて悪事を働いていたこ

とが判明し、死刑に処せられ寺も廃される話で、因果応報を説く。二二「呂洞賓」と四〇「馬當神」はいずれもある男が神仙になるまでの過程を描く。

(22) 注(5) 福満正博前掲論文参照。

(23) 「本齋購得古今名人演義一百二十種、先以三之一爲初刻云」

(24) 「明者取其可以導愚也、通者取其可以適俗也、恒則習之而不厭、傳之而可久」

表1 「三言」各対の構成、及び対同士の関わり一覽
(参考) 調査結果を次のように表示する

巻数	題目	対パター	主張	展開	対同士の関わり
1A	古今小説		<p>主張が同じである。 (善因) 要因</p> <p>一篇の主張が異なる。 各篇の主張をそれぞれ示す。</p>	<p>話の全体を通じて二篇が平行的な展開である。</p> <p>一部に類似が見られ、それが同じ方向に発展、終結する。</p> <p>平行性も類似も見られない。 各篇の大筋の展開をそれぞれ示す。</p>	<p>対同士の関わり その他の主張</p> <p>隣り合う対で類似が見られる。 〈類似点の説明〉</p> <p>その他の主張。対同士をつないでいるもの。 その他の主張。</p>
					対同士の関わり その他の主張

一	蔣興哥重會珍珠衫	I	▽ 応報	〔姦淫〕	▽ 人の妻を取って逆に自分の妻を取られる	▽ 〔色に迷い、後にその報いを受ける〕
二	陳御史巧勘金釵鈿	I	▽ 応報	〔色情〕	▽ 自分を偽ることをして 命を危うくする	▽ 悔い改め 死ぬ
三	新橋市韓五賣春情	I'	▽ 貞節	〔負義〕	▽ 相手の過去の過ちを気にせず受けた 恩に報いる 重賢軽色	▽ 天命(姻縁)
四	閒雲菴阮二償冤債	I	▽ 報恩	▽ 報恩	▽ 受けた恩に命をかけて報いる 〔死友〕	▽ 古人の例 今人の例
五	窮馬周遭際賣鮓媪	I	▽ 報恩	▽ 報恩	▽ 重義軽財の陰徳により長寿、子孫 繁栄	▽ 〔義〕
六	葛令公生遣弄珠兒	I	▽ 報恩	▽ 報恩	▽ 輕義重財で逆に損をし家は滅びる	
七	羊角哀捨命全交	I	▽ 報恩・義(交友)	▽ 報恩・義(交友)	▽ 仁宗と才子	
八	吳保安棄家贖友	I	▽ 報恩・義(交友)	▽ 報恩・義(交友)	▽ 壁題詩により任官する 詞により免官になる	
九	裴晉公義還原配	I'	▽ 應報	▽ 〔重義軽財〕	▽ 天命(出世)	
一〇	滕大尹鬼斷家私	I'	▽ 應報	▽ 〔輕義重財・不孝不弟〕	▽ 天命(出世)	
一一	趙伯昇茶肆遇仁宗	I'	▽ 天命	▽ 風流	▽ 欲を捨てて	
一二	衆名姬春風吊柳七	I'	▽ 天命	▽ 風流	▽ 神仙になる	
一三	張道陵七試趙昇	I	▽ 欲を捨てる	▽ 欲を捨てて	▽ 心の安靜を得る	
一四	陳希夷四辭朝命	I	▽ 欲を捨てる	▽ 欲を捨てて	▽ 神仙になる	
一五	史弘肇龍虎君臣會	I	▽ 交友	▽ 交友	▽ 死により全うさせる「死友」	
一六	范巨卿雞黍死生交	I	▽ 交友	▽ 交友	▽ 死により全うさせる「死友」	
一七	單符郎全州佳偶	I	▽ 交友	▽ 交友	▽ 死により全うさせる「死友」	
一八	楊八老越國奇逢	I	▽ 天命	▽ 天命(姻縁)	▽ 離れ離れになった者が苦難の末再 會、団円する	▽ 深い情愛 〔困難を乗り越える 特に一七・一八〕

一九	楊謙之客舫偶俠僧	I'	▽ 応報	貞節	誠	ある困難に直面した者が誠実だったために援助を受け乗り越える	男女は離別 再会	二〇は離れ離れになった者が再会 団円する
二〇	陳從善梅嶺失渾家	I'	▽ （応報） 応報			出世 ▽ 専横したため仇討ちにあう		天命（姻縁）
二一	臨安里錢婆留筇跡	I'	▽ 義 ▽ 応報	〔負義〕		元宵節に男が女と会い再婚しないことを誓う	男女は再会、団円 男は負義、死ぬ	深い情愛
二二	木綿菴鄭虎臣報冤	I'	▽ 義 ▽ 応報	〔負義〕		些細なものが多くの人命を奪う引き金になる		
二三	張舜美元宵得麗女	I'	▽ 義 ▽ 節孝	〔負義〕		女の恩情に背くがやりこめられ再婚 薄情 女の恩情に報い結婚、団円		天命（姻縁）
二四	楊思温燕山逢故人	I'	▽ 義 ▽ 節孝	〔負義〕		僧が色戒を破る 転生後因果を悟り仏道に帰衣して円寂する		
二五	晏平仲二桃殺三士	I'	▽ 義 ▽ 節孝	〔負義〕		秀才が地獄を訪れ、前世の因が後世の果を生むことに立ち会う 来世を約束される		輪廻・応報
二六	沈小官一鳥害七命	I'	▽ 義 ▽ 節孝	〔負義〕		救難の見返りに異類の女を得る 男女は昇天・仁慈の心なく損する 女は去る・仁慈の心あり得る		
二七	金玉奴棒打薄情郎	I'	▽ 義 ▽ 節孝	〔負義〕				
二八	李秀卿義結黃貞女	I'	▽ 義 ▽ 節孝	〔負義〕				
二九	月明和尚度柳翠	I'	▽ 義 ▽ 節孝	〔負義〕				
三〇	明悟禪師趕五戒	I'	▽ 義 ▽ 節孝	〔負義〕				
三一	鬧陰司司馬貌斷獄	I'	▽ 義 ▽ 節孝	〔負義〕				
三二	遊酆都胡母迪吟詩	I'	▽ 義 ▽ 節孝	〔負義〕				
三三	張古老種瓜娶文女	I'	▽ 義 ▽ 節孝	〔負義〕				
三四	李公子救蛇獲稱心	I'	▽ 義 ▽ 節孝	〔負義〕				

I B 警世通言		I B 警世通言		I B 警世通言	
卷数	題目	対パ ンタ	主 張	展 開	対同士の関わり その他の主張
三五	簡帖僧巧騙皇甫妻	I	応報	悪いことをした者が後にその報いを受ける 大尹に裁かれる	
三六	宋四公大鬧禁魂張	i	輪廻 応報	行ないにより 極楽へ 神になる	口は禍のもと
三七	梁武帝累修成佛	I	天命・応報	偉丈夫が冤罪を被り死ぬ 後に罪が晴れ、一族はまた繁栄する 罪に陥れた者達は報いを受け死ぬ	
三八	任孝子烈性爲神				
三九	汪信之一死救全家				
四〇	沈小霞相會出師表				
一	俞伯牙捧琴謝知音	I	物に固執しない	真偽を見極め、物に固執せず顧みない	
二	莊子休鼓盆成大道	I	一時の評判で人を判断し 謙虚 ない	王安石 才能あるさま 蘇軾は才を 持みやりこめられる 非道な政治を恨まれる中で 死ぬ	
三	王安石三難蘇學士	I	謙虚	王安石 非道な政治を恨まれる中で 死ぬ	
四	拗相公飲恨半山堂	I	謙虚	王安石 非道な政治を恨まれる中で 死ぬ	
五	呂大郎還金完骨肉	IV	天命(出世) 返金	金を返したことにより離散した家 族が再会、団円 才子が壁題詞により任官する	壁題の詩詞で出世する
六	俞仲舉題詩遇上皇	i	天命(返金)	前世の宿債を返すため現世に出現 返して姿を消す	
七	陳可常端陽仙化				
八	崔待詔生死冤家				

九	李謫仙醉草嚇蠻書	III	風流	李白の才能あるさま 登用から死まで 才子が詩を詠んで女の霊を弔う	
一〇	錢舍人題詩燕子樓	I	応報	強盜にあい一家離散する 女は一味の中の一人に救われる ある品物が鍵となり再会、団円	貞節
一一	蘇知縣羅衫再合	I	応報	色に迷ったため報いを 受ける	色に迷って命を危うくする
一二	范鰥兒雙鏡重圓	I'	応報	冤罪を被るが、後罪が晴れ許される ↓ 実直なために禍を免れる	貞節
一三	三現身包龍圖斷冤	(I) I'	応報	不遇の者が後に時の運を得て出世、 団円	貞節
一四	一窟鬼癩道人除怪	I'	加害しない 応報	異常物と関わって怪異 が引き起こされる	報恩
一五	金令史美婢酬秀童	I'	義 応報	男女が苦難を越える 別離、女は自害 女は節を守る	貞節
一六	小夫人金錢贈年少	I	深い情愛	恋する男女が苦難を越え結ばれる	天命(姻縁) 男女が苦難を越える 特に二一、二四は団円 で終わる
一七	鈍秀才一朝交泰	I	深い情愛・風流	恩を仇で返し、後にその報いを受 ける	深い情愛
一八	老門生三世報恩	IV	深い情愛・風流	唐寅の才子ぶり 一途に想う娘と 結婚する	
一九	崔衙内自鷄招妖				
二〇	計押番金鰻產禍				
二一	趙太祖千里送京娘				
二二	宋小官團圓破氍笠				
二三	樂小舍拚生覓偶				
二四	玉堂春落難逢夫				
二五	桂員外途窮懺悔				
二六	唐解元一笑姻緣				

三	賣油郎獨占花魁
四	灌園叟晚逢仙女
五	大樹坡義虎送親
六	小水灣天狐詭書
七	錢秀才錯占鳳凰儔
八	喬太守亂點鴛鴦譜
九	陳多壽生死夫妻
一〇	劉小官雌雄兄弟
一一	蘇小妹三難新郎
一二	佛印師四調琴娘
一三	勘皮靴單證二郎神
一四	鬧樊樓多情周勝仙
一五	赫大卿遺恨鴛鴦繚
一六	陸五漢硬留合色鞋
一七	張孝基陳留認舅
一八	施潤澤灘闊逢友
一九	白玉孃忍苦成夫
二〇	張廷秀逃生救父

II	I	I	I	I	I	I	I'	II
節義 應報	應報	應報	應報	交友?	節義・應報	天命(姻縁)・應報	節義 應報	幫襯 惜花・應報
[財]	[淫奢 返金]	[姦淫]	[姦淫]		(人助け)		(仁慈 仁慈なし)	
離れ離れになった者が苦難を越え再 會、団円 女は節を守る	財産、金を返したことで陰徳を積み その報いを受ける	姦淫から事件を引き起こす 姦淫した者は裁きで死刑に処せられ る	姦淫から奇怪な事が起きる 姦淫した者は裁きで死刑に処せられ る	蘇東坡関連のこと 与えられた試練 を越え、交情厚くなる	節義を全うして、後に団円する	替へ玉として婚礼に臨んだ者が 裁きで本当に結婚する	動物が恩がえしをする 動物が仇を討つ	一途に(妓女)を愛し 花(報われ)る 結婚、団円 仙人になる

貞節

色に迷う

色に迷わない
應報
姦淫↓死罪

天命(姻縁)
八↓男性女装
一〇↓女性男装

二二	張淑兒巧智脱楊生	II	節孝・応報	義節孝により家を興す 旌表を賜わる
二二	呂洞賓飛劍斬黃龍	I	応報	些細な物事が人命を奪う引き金になる 裁きで死罪に処せられる
二三	金海陵縦欲亡身	i	天命(出世・姻縁)	もらった神臂弓で発跡 あげた玉馬墜の靈験で結婚、団円
二四	隋煬帝逸遊召讎	II	謙虚 応報	妻の言葉に従い善人に不当な仕打ちをする 後にその報いを受ける 被害者は救われる
二五	獨孤生帰途鬧夢	ii'	天命(姻縁) 応報	天の定めによる姻縁 継子いじめ 団円
二六	薛録事魚服證仙	II	深い情愛 心を修む 神仙の因縁	夫婦が別れている間に夢を見る 覚めて廟の靈験を知り参詣する
二七	李玉英獄中訟冤	I	応報	王位にある者が好色貪淫で民を顧みない 後に死に追いやられる
二八	吳衛内鄰舟赴約	IV	天命(姻縁)・応報 欲を捨てる?	男が僧の強盗にあい、ある娘に救われる 後にその娘と結婚する 呂洞賓が試鍊を越え道を悟る 仙人になる
二九	盧大學詩酒傲公侯			口は禍のもと
三〇	李汧公窮邸遇俠客			
三一	鄭節使立功神臂弓			
三二	黃秀才傲靈玉馬墜			
三三	十五貫戲言成巧禍			
三四	一文錢小隙造奇冤			
三五	徐老僕義憤成家			
三六	蔡瑞虹忍辱報仇			

〈想いが極まり 夢を見る〉

公平な裁き

応報

三七 杜子春三入長安	三八 李道人獨步雲門	三九 汪大尹火焚寶蓮寺	四〇 馬當神風送滕王閣
I	IV		
<p>欲を捨て身を修める</p>	<p>応報 天命</p> <p>〔姦淫〕</p>		
<p>課されたタブーを犯した男が世俗に 戻される 後に善行を積み仙人に なる</p>	<p>僧が姦淫し、裁きで死罪になる 詩人が才能を買われて仙人になる</p>		
<p>〈神仙になる方法〉</p>			